

評議員に就任して

田 隅 三 生（化学教室）



去る4月18日大講堂改修竣工式典に出席して、私の胸にはさまざまな思いが去来した。オーケストラの演奏で始まった式典は、曲目が大学祝典序曲ではなかったことを除くと、かつて私が経験した入学式、卒業式、大学院修了式とほとんど同じ形式をとっているように思われ、私を四半世紀以前の東大にタイムスリップさせた。

35年前の入学式の日、私が講堂に着いたとき既に内部は満員になっていた。私は脇の入口の外で背伸びをして、式辞を述べておられる矢内原総長の端正な横顔をやっと見ることができた。31年前の卒業式と29年前の修士修了式では座席につくことができ、茅総長のお話を伺った。26年前の博士修了式では、修了する学生は一人ずつ壇上にあが

って大河内総長から直接学位記を受けた。学位記を手渡された瞬間こそ誇らしさの頂点であった。しかし、今思えば、それは古典的大学論に基づく象牙の塔的大学への訣別でもあったようだ。

1965年から二年間私は海外に行った。初めの1年を過ごした米国ミシガン大学では、ベトナム反戦運動の原点となったティーチ・インを見た。次の1年間滞在したイタリアのミラノ工科大学では、それからしばらくあとで西欧各地の大学に吹き荒れることとなる紛争の嵐の予兆を感じた。

帰国して化学教室助手に復職した私には、東大の雰囲気はどこか元と異なるように思えた。帰国した翌年の1968年からそれは明確な形で表れ、東大紛争が始まった。安田講堂は終始紛争の中心であった。化学教室が講堂のすぐ近くに位置していることもあって、私は紛争中に起きた一連の事件を逐一見ている。紛争解決に直接責任のない助手という立場にあったため、いろいろな動きをやや客観的に観察しえたことを今では有り難く思っている。

1971年から約6年間生物化学教室に助教授として務め、1977年化学教室に教授として戻った。以後、自分の研究室のことから全学レベルまでさまざまな経験をしてきた。そのなかで、東京大学百

年史理学部編編集委員として化学教室と理学部の歴史を調べたこと、1986年4月から当時学部長であった有馬現総長のご指名により、森総長のもとで総長補佐を1年間務めたことなどにより、理学部と東大の将来という問題が私の関心事となった。

安田講堂という建物をほぼ復旧することはできても、東大を元に戻すことはできない。東大は時代とともに進むしかない。東大の将来をかける大学院重点化の論議において、理学部は常に先兵の

役割を果たしてきた。理学院計画案の作成については、私も多数の方々とともに長い時間を費やしてきた。計画案が一応成った現在、これを議論倒れに終わらせることは絶対に避けねばならない。しかし、理学院計画の実現には多くの困難が予想されることも事実である。理学部の方々はもとより、理学系研究科関係者とも協力して、できる限り計画案に近い形の理学院の実現に微力を尽くす積りである。